

自選 五十首

江戸 雪
YUKI Edo

〔えと・ゆき〕一九六六年、大阪府高槻市生まれ。大阪市在住。三歳から結婚する二六歳まで兵庫県尼崎市に住む。結婚後、短歌を始める。河野裕子に出会い、「塔」に入会。歌集は「百合オイル」ほか四冊。ふだんはいいかげんでよく嘘をつくが、歌においては真面目で嘘をつきません。

赤道はしずかにほどこけ甘いままなくなっていく舌のキャラメル『百合オイル』（一九九七年）

こでまりをゆさゆさ咲かす部屋だからソファにスカートあふれさせておく

エッチングのような雨です留守電をあおい厨にしゃがみつつきく

終りだけ思い出せない物語ゆるいカーブの道、海に消ゆ

私ならふらない 首をつながれて尻尾を煙のように振る犬

はじめには原因はないと友が言うのの字のロールケーキわけつつ

つくりもののような鼻してほくたちはつくりものなる言葉を交わす

地図になき海岸きみの教えしが水面のひかりだけはそのまま

じょうだんは本当でした文机に足のせて読む『長いお別れ』

曇天を見上げて飲みしラッシーのすっぱさ舌にヴァラナシを発つ

馬の胴ほどのやわさよ草いきれ踏みしめるとき夏のさきぶれ

朽ちし葉にがさと立ちたる鳩のそばひとにはころがないと思う日

いま君を隔てていたる川の数、木の数、昼にみる星の数

ただ天く生きようとしてたちつくし雨を享けたり蓮池の辺に

『椿夜』（二〇〇一年）

タランチュラ 舞踏のような名の蜘蛛がいてあおぞらは眼をとじいたり

かんたんに理解されてもこまるのよ朝は祈るし夜には憎む

はなやかなぶあつい肉の満月よこちらへおいで泣かせてあげる

炎天に出れば重心ぐらぐらとわれの内がわ通過する子よ

アメリカゆ兄のかえり来うつくしき妻とみずうみのような子を曳き

人生は長いのだよと文とどき未来の桜わきやまぬ夜

青空の錯覚のような滑り台たつたひとりで子はすべりくる

この空に棲むとおもえば楽しかりわずかな息を吐きて逝きし子 【DOORI (二〇〇五年)】

自動ドアすみやかに開き向こうからやさしさばかり押しよせてくる

天国はどこでもないと言ひ渡す陽のなかに寝るビーグル犬に

へらへらと忘れてゆくよ初夏はつなつにたつたひとりが死んだせんそう

腹を二度切ったのにまだわがうちに紙風船のような憎しみ

チヨコレート詰まった金の缶が立ちなかでテロルがおこなわれおり

砂のなか射ち殺されしテロリストのくらき母なりひとときわれは

海は血をふかく沈ませ風いでいる報復という冷たい詩形

川底に靴を忘れてきたような一日がある 母の逝く夏

さあさあと雨に囲まれ子は泣けりああ水っぽい生きもの子ども

ミモザの黄すでに失せたり這い上がる感じを持ちてひとりゆく道

四十歳を超えてから急に、人生に残された時間が気になりはじめた。それまでは歩んできた時間の嵩かさばかり気にしていたのに。もうそんなことはどうでもよくなった。あとに何か残したいとおもわない。とにかく残された時間のなかで、まっとうできることは何だろう、とよく考える。

そのせいか、今のわたしは先ほどまでのわたしでありたくないと思っておもうようになった。けれど、内なる力によるだけでは何も変わりはない。自分を鏡に映すだけでは、どんどん自分がかわいくなっていくだけだ。自分がかわいくなった時点ですべてが停滞する。

だから、日々の暮らしのなかで、できる限りのものを見て聞いて触れて知りたい。事物を知れば知るほど、自分が情けなくちっぽけな存在であるということ、眼の前につきつけられ、自省する。それだけでも、1ミリくらいはましな人間になれる気がする。

「公平」という言葉が好きだ。何にも囚われず、まっしろな場所に立っていたい。

なにとなく羽の裂け目が気になりて去年の扇を取り出している

君のその昏き頭にのりしゆえ触れがたきかな ハンチング帽

翼閉じ君のとなりに坐るだけ それは恋かと空はきくけど

碧空をうけいれてきたただけなのに異形のひととしてそこにいる

遠国の恐怖支配とぞ 壺のなか塩はしめりをおびてかがやく

好きだけでもう逢えないとおもう ただいろいろあつて躑躅がきれい

なにもかも知ってしまった後の洞かかえて鳥は空を出でゆく

やわらかき三十六色クレヨンを子に借りる夕、驟雨きらめく

近づいてまた遠ざかるヘッドライトそのたびごとに顔面すてる

かの声はしずかに耳に残りおりからすのえんどうひと蔓が銀

枯草のにおいをさせて飛ぶ鳥へそこは空かとわれは問いたり

テロルより嘘にくむべし朝顔の幼芽しずかにたちあがりたり

「いいえ、」と云い死ぬためわれは弾痕をもたない空を抱きしめている

涙は ぜいたくひんのようであり花携えず運ばれる死者

雨傘を泥につきさしながら行く何かを君に誓いたき日は

スクイズの走者のように来てほしい十月の空ぼっかり澄みて

ここはまだ平和ですのと咲いているひまわり風にゆれるひまわり

どんぐりは家の中でもどんぐりでさびしさの数かぞえていたる

『駒鳥』(二〇〇九年)

ただ、生きていくうえでそれはとても難しいこと。公平でありたいとおもっている、いつのまにか振れ(振)ていることもよくある。

そんなとき歌が支えてくれることに気づくのだ。

むろん、歌で何かを云おうとも云えらることもおもっていない。ましてや、断罪者になれるはずもない。ただ、公平な者でありたいのだ。公平な者として、人間のどこかに存在するかもしれない真(まこと)をもとめていたのだ。

日々の、個人的ないりくんだ事柄や事件、あるいは観念的な主張を素材として詠んだこともあった。しかし、最近ではできるならばそこからは離れて詠みたいとおもふことが多い。なぜなら、そのように詠むことだけが、人間の真をもとめることだとはおもわないからである。

たとえば、空を飛ぶ鳥をみたり、あるいは夏空にむかつてすっきりと立つ向日葵のそばに立つてみることで真を手練りよせることのほうに、いまは興味がある。